

# 「幼児教育の源流」Ⅳ

## デイーステルヴェークの幼児教育論



生 馬 寛 信

はじめに

十九世紀中葉のドイツにおいて活躍した教育家デイーステルヴェークの幼児教育思想を述べていくにあたり、まず当時のドイツの幼児教育界の概略を紹介することからはじめよう。

一八三〇年代に後進国ドイツでもはじまった産業革命は、幼児の世界にも影響を及ぼさずにはおかなかった。すなわち、婦人や時には幼児さえもが工場に働きに出ることで家庭教育は崩壊し、子どもたちの道徳的墮落や身体的不具化や発育不全がおこるといふ状況を呈していたのである。このため、母親が安心して働きに出るよう、また子どもたちの道徳的、身体的傷害が防止されるようにという意図をもって、幼児学校や幼児保護施設といった幼児教育機関が設立されていた。しかしこれらの幼

児機関の大部分は単に社会的危機の軽減のための手段として作られたものであり、いわば社会政策的な所産にとどまるものであった。これに対しフレールベルは、そのような社会状況をふまえながら、さらに教育学的見地から「幼稚園」という新しい幼児教育機関を設立した。彼は幼稚園で、幼児期の発達特性の認識にもとづいて、遊びと作業による教育を行なおうとしたのである。フレールベルのこの幼稚園で、自己の理念が実現されつつあるのを発見し、これを広汎な文筆活動を通じて宣伝したのが、本稿で扱うデイーステルヴェークである。

デイーステルヴェークが幼児期の教育に関心をよせるようになった要因として、二つのことが考えられる。その一つは当時の幼児教育理論や実践の高揚である。すでにルソーやペスタロッチらにより教育対象としての幼児の発見がされていたが、当

時の幼児教育はこれを継承し、実践し、それによって理論的にも実践的にも非常に高まりを見せていた。その頂点に立っていたのがフレーベルであった。ルソーやペスタロッチの教育思想の継承者を自認するディーステルヴェークは、すでに早くから幼児期教育の重要性をみとめていたが、フレーベルとの関係がその関心をさらに強いものにしたのである。第二には、産業革命下での家庭教育の崩壊への対処であった。

とはいえ、ディーステルヴェークは正確に言えば幼児教育の専門家ではない。彼の主関心は国民学校にあり、そのための科学的な学校教育を確立することに力をそそいだのである。そのため系統だった独自の幼児教育論を展開するまでには至らない。彼は主として幼児教育機関やそれとの関連で、将来の母を教育するための女子教育に眼を向けたのである。

ディーステルヴェークの幼児教育論は以上のような限界をもつから、本稿では次のような構成をとる。

〔一〕教育論の基本原則 ここでは最も基本的な原理をあげるが、この中で幼児教育論の基本になるものについてわずかばかりふれる。〔二〕幼児教育論 フレーベルとの出会いが重要であるので、一八四九年以前と一八四九年以後にわけて述べてみたい。

## 〔一〕教育論の基本原則

### 《自己活動》

ディーステルヴェークの教育論、人間論の中核になっているのは自己活動の原理である。自己活動が教育のよしあしをはかる尺度にさえなっている。彼のいう自己活動とは、自由な自己決定による自主的、自発的、主体的な活動であり、しかもそれは、何か高い目標と発展をめざしての活動である。そしてこのような自己活動は、人間のうちなる本来人間のなるものであると同時に、人間的なるものすべて、自由や個性を生み出す根源なのである。

基本的には右のようなものであるが、彼のいう自己活動は広い意味をもっている。また低い段階の自己活動も高い段階の自己活動もある。彼は自己活動は人間が生まれながらもつ衝動にもとづいてみるとみているが、この意味では乳児にも自己活動はある。しかしこのような自己活動は、教育によって最も高い発展段階にまで高められなければならない。高い次元の自己活動とは、たとえば、精神が自由な自己決定に従う段階での精神の活動をいう。さらには、社会の機構や習俗から自由であることも広い意味での自己活動である。当時のような市民社会の

成立期においては、自主的、主体的な人間、自由な思考のできる人間が要請されていた。この意味で、ディーステルヴェークの教育論は市民階級の教育論であった。

自由な自己活動などの高い次元の自己活動は到達されるべき目的である。この意味では自己活動の原理は目的原理である。

しかし同時に、人間諸力が結局自己の努力と活動によって発展しなければならぬものであるとする彼の考えからすれば、自己活動の原理は方法原理でもある。ディーステルヴェークの考えた授業においては、子どもの自主性、自発性、自由的思考がもとめられ、それを通してまた、自己活動の能力が陶冶されるのである。

以上の自己活動の原理は、全くの形成的原理であって、これに内容原理を結合しなければならない。ディーステルヴェークは、内容原理を「真・美・善」として設定し、この両者をあわせて「真・美・善に奉仕する自己活動」<sup>①</sup>とし、これをもって人間がめざすべき使命であるとしたのである。

### 《合自然の教育》

ディーステルヴェークの「自然」は、ルソー、バゼドー、ペスタロッチを経て発展した主観的自然主義の流れをくみ、主と

して人間主体の側の自然と解されている。合自然の教育とは、この主体の本性のままに、しかも本性にのっとった方法によって行なわれる教育なのである。そこで次のようにいう「人間教育においては、一般的にいえば人間の自然本性に、より個別的にいえば個性に反したことは何ごともおこりえない」<sup>②</sup>

合自然の教育原理でまず問題となるのは、発達の問題である。ディーステルヴェークは、人間の中に活動や能力の可能体としての素質をみた。これらの素質が刺激によって十全に、調和的に発展することによって活動力や生きた能力になりうると考えた。

ところで、ディーステルヴェークによれば、各個人のもつ素質には種類、程度、エネルギーにおいて多様なものがあり、それらはすでに生れつき決定されているものである。しかも人間の能力、活動は素質がある程度だけしか発達しないものである。これらのことから、彼は、個人の発達可能性はあらかじめ予定されていて、後天的には改変しえないものと考えていた。

このような所与の素質が十全に、調和的に発展するよう刺激するのが教育である。しかし、発達や陶冶は本来的には「他人によって与えられないし、他人からは分与されえない。それらに関係しようとする者は誰でも、自分自身の力と努力で獲得

しなければならぬ」③他人はただ誘発できるにすぎないのである。このように、ディーステルヴェークは素質決定論、自己教育論を主張したのである。

もう一つ、ディーステルヴェークの合自然の原理での特徴的なことは、それが人間性に対する楽天主義で貫かれていることである。子どもはその自然本性の中に本質的にエゴイズムをもつ自然のエゴイストであるとしている。だが、このエゴイズムは、すべての子どもにまず自分自身への配慮をさせるもの、自分の欲求や欲望を自覚させるものなのである。子どもが他人のために配慮するというのは、ディーステルヴェークにとってはむしろ不自然なことであった。この点彼の見解は、自愛心を道徳的行為の源泉とみるルソーに近い立場であり、ペスタロッチとは異なっている。また、人間を生れつき墮落したものの、原罪をもつものとみる正教会の教育観とは激しく対立した。

#### 《発達段階》

ディーステルヴェークは、次のような基本的な発達段階を設定した。④

#### (1) 感性の段階

最初の段階。精神は外からの刺激や外からの作用への反応と

して活動するだけである。外からの刺激から独立した内からの活動はありえない。子どもは瞬間的に作用してくる力に身をゆだねる。そして表象系列、一定の情緒、習慣や傾向性は形成されていない。この段階では人間は、道徳性に関しては無垢の状態、文化に関しては粗野の状態、一般的にいえば自然状態にある。

#### (2) 習慣と空想性（ファンタジー）の段階

個々人の中に、認識においては一定の表象系列、感情においては一定の情緒、行動においては習慣と習熟性が形成される。刺激によって生じた活動は継続され、個々の運動間にも相互作用がある。しかし自由な自己活動だけは欠けている。

この段階でのより下位の段階では、想像力はまだ反復的で模倣的であるが、より上位の段階になれば、自由に想像することができるようになる。またこの段階では、一方では、記憶したとおりの思考しかなかったり、習慣とおりのことしかししないこともあるが、一方では、自由に動きまわったり、自由な、生き生きとした空想や想像をめぐらし、時には空想に心をうばわれてしまうこともできるようになる。

#### (3) 精神の最高の発達段階、自由な自己規定の段階

この段階に至って精神は今や自立的で自由であり、内から外

に働きかけるのであり、真理のため、善のため、美のため、人生の無限の発展と完成のために活動する。

ディーステルヴェークは、第一の段階と第二段階を生まれてから九歳くらいまでの子どもの発達段階とみた。したがって彼はこの時期の子どもの主な発達課題は、

「子どもの四肢を訓練すること、子どもの感覚器官を刺激し強化すること、直観能力や言語能力を発達させること、生き生きとした空想を行なわせること、換言すれば、子どもの肉體、知性、心情の基礎的諸力を発達させることにある」<sup>⑤</sup>

とみたのである。またディーステルヴェークからみれば、無邪気で、健康なよい子どもはほがらかなものである。だから、明るいふん囲気の中でこそ精神や身体の動きが活発になり、労働や作業への喜びもわきおこるのである。

### 《直観教授》

ディーステルヴェークによれば、人間の認識過程は、感覚器官による具体事物の感覚的知覚にはじまり、悟性による概念化におわる過程である。直観による教授とはこの過程にもとづくものである。すなわち、感覚的知覚から出発して、それに精神的作為を加えて概念にまで至らしめようとするものであり、そ

のために対象への配慮がなされる。

ところが、当時の学校で行なわれていた「ことば主義」の教授では、概念であることばから出発するから、知識を得ることはできても事物の本質の認識には至らず、獲得された知識は単なることばの空虚なひびきになってしまう。その結果、子どもは精神的隷属に陥り、自主的な思考力の発展が阻害されてしまうのである。それに対して直観教授は、単に知識の受容を容易にするだけではない。それは、子どもが自分で感覚的に知覚したものに、自分の能力的思考作用（比較、分析、総合）を加え、本質概念を把握するよう導くのであるから、子どもの思考力と自己活動の能力を養うことができるのである。

右のような意味での直観教授の原理にもとづいていくつかの教授規則をあげている。

- ① 近きものより遠きものへ
- ② 既知のものから未知のものへ
- ③ 感覚で対象をつかませよ
- ④ 小さな全体を与えよ
- ⑤ 具体事物からことばへ
- ⑥ 特殊なものの知識から一般的なものの知識へ

①については出発を子どもの身体にもとめることには反対している。子どもの認識対象として自分の身体が最も近くにあるものではないと考えたからである。幼児期の直観教授について

は、あまり早くから思考力を養成しようとするものや、直観の対象が不適当なものには反対している。

そこで一八二九年に、幼児学校および民衆学校最下級生のための直観教授について提案している。最初のものだけをあげてみる。<sup>⑥</sup>

一 教室内にある対象についての知識

1 教室内の対象の名前をいったり、描写したりする

2 今まで観察した対象の比較

3 規則的な物体の観察

なお、フレーベルの幼稚園でみた直観教授には高い評価を与えている。

### 《遊び》

幼児のもつほがらかさや明るさ、無邪気さや快活さを失なわずに、せないで身体訓練や感情訓練、心情陶冶や精神的(知的)陶冶を可能にする子どもの活動を、ディーステルヴェークは遊びにみいだした。とくにフレーベルの遊びの中で「愛や真心、友情や協調性、全体への結合がもたらされ、共同体への従属がなされる」<sup>⑦</sup>また「注意力が発達し、話す力、歌う力、聴く力、理解する力、従う力が陶冶され、機敏さ、活発さ、活動力が生ず

る。つまり、幸福でエネルギーな生活を条件づけるすべての諸特性が生ずるのである」<sup>⑧</sup>このように考える時、遊びのために配慮することが教育者の課題となるのである。「子どもの生活は遊びである。遊びと子どもは同一のものである。遊ぼうとしない子どもはもはや病気である。それゆえ子どもの発達と陶冶は遊びによっておこる。そこで子どもの本性に応じて発達させ、陶冶する、合目的な魅力ある遊びのために配慮することが子どもの教育者の課題である」<sup>⑨</sup>

ディーステルヴェークはもともと遊びの教育的意義を高く評価していたが、フレーベルに傾倒するようになってからは、フレーベル的な遊びをとくに強く主張するようになった。

それではどの点に意義を見いだしたのだろうか。第一に、遊びを通して健康な子どもの中にある生き生きとした活動衝動は作業衝動へと高められるということ。また、幼児期の遊びや作業によって高次の創造的活動に発展させるのである。第二に、とくに幼稚園での遊びの意義である。幼稚園は共同体であり、共同体での遊びを通して、統一国民国家の将来の望ましい市民を教育しうるのである。「早くから子どもを調和的に組織された共同体に入れ、それになれさせなければならない。幼稚園はそのような調和的な統一体である」<sup>⑩</sup>そのような共同体の中で

の遊びでは、子どもの最高の遊び道具は他の子どもでもあり、その中で友情や愛を学ぶのである。第三に、共同体での共同遊びは生活との結合を可能にする。遊びの中で「子どもは自分を忘れ『大人』を演じることがよくある。子どもは幼稚園の中で、後には意識的に体験する生活を演じているのである。かれの遊びは人間生活の予行演習である」<sup>⑪</sup>

以上のように、ディーステルヴェークの遊びについての見解は、フレーベルの幼稚園での遊びを紹介したものが多く、しかしここで指摘しておかねばならないことは、フレーベルに濃厚なロマンティックの影響を払拭して、合理主義、啓蒙主義の立場から、遊びそのものに意義をおいたということである。

## 〔二〕幼児教育論

### (1) 家庭教育の崩壊と幼児教育機関

ディーステルヴェークにとって、家庭は本来子ども素質を発達させるための大地であり、大気なのであった。ところが現実には、非常に多くの家庭で家族の尊厳さがほとんど最後の痕跡まで消え失せてしまっていた。そして教育することの喜びよりも、苦痛を感じる家庭の方が多くなってしまっていた。ディーステルヴェークは、この現象は富裕階級の家庭にもあてはま

るとみていたが、ことに深刻だったのは下層階級の家庭の場合であった。貧困と悲惨、児童労働は貧民の子どもたちからかれらの「人生の春」を奪っていただけではない、家庭教育を可能にしていたのである。彼はそのことを次のように述べている。少し長くなるが、彼の、子どものおかれた社会的状況への確かな洞察眼があらわれているので引用する。

「人口稠密な工場都市において、大抵の工場労働者の子どもは、悲惨な状況のもとであえぎ、敗れ、身体や精神をだめにしているが、人々はその貧困状態のみを考える。不幸な両親は毎日パンの心配をしなければならないから、そのために最も神聖な義務を怠り、小さな子どもを腐敗した空気の中でほとんど監視もせずに放置せざるをえなくなっている。そして子どもたちは、成長する前にすでに、かれらの家庭の収入の不足を補うために工場労働を強制されている。身体も精神もうまく成長せず、早くから、身体的な病弱や精神的弱さ、あらゆるハンディのものがつくられるから、どんな家庭の幸福も、どんな市民的幸福もありえないのである。このような状況が存在するかぎり、工場は大いに金をその地方にもたらす、しかし大抵は、多量の金は工場主のふところだけ入って、工場の中では多くの不幸な大人や子どもが生活している」<sup>⑫</sup>

このような状態を救うための施設として、幼児学校や幼児保護施設などとよばれる幼児教育機関があった。そういった施設では、子どもの道徳的墮落や子どもが将来無能力で怠惰な市民となるのを防ぐべく、宗教道徳教育が重視された。また施設によつてはかなり早期の知識教育が行なわれたり、手労働が行なわれた所もあり、将来の有能な労働者をつくるべく身体訓練も行なわれていた。このような幼児教育機関に対してディーステルヴェークは不満を表明している。

たとえば幼児学校について見解を述べたカール・ジョンという人を批判する形で、次のような指摘を行なっている。① 宗教教育に頼りすぎていること、② 道徳的悪影響から子どもを守ることを主目的にしているようだが、幼児学校の目的はむしろ、身体的不具化を防ぐこと、身体を強くしたり逞しくしたりすること、注意力和話す能力、活動力を覚醒することにある。③ 幼児学校では本格的な授業にあまり重きをおくべきではない。直観教授であつても、その直観の対象には生徒の身近にあるものを選ぶべきである。

このような不満をもちながらもディーステルヴェークは、当時のとくに下層階級の子どもたちのおかれた逼迫した状態の認識から、幼児教育機関を絶対必要なものとみたのである。そこ

で次のような教育条件の整備を要求している。第一に、広い遊び場所（身体訓練と明るく楽しい遊びのために）第二に、幼児を合目的に、教育的に活動させるための教育的教養ある有能な教師や校長（その際、教会関係者が教師や校長を兼ねることには反対している）。

今までみてきた考え方には、フレイベルの幼稚園の考え方と通じるものがあるが、一八四九年以前には、フレイベルに対して消極的評価しかしていなかった。むしろフレイベルの遊びと作業の体系に関する諸論文（たとえば『さあ、子どもに生きようではないか』などをあげている）をいつも懐疑の眼をもって受けとめ、「常規を逸した見解」⑭とみていたのである。とくにフレイベル派の人々が、球や立方体などの「恩物」による遊びの中で世界法則が把握されると考えていたことに對し、幼児はそのような状態にはないということ、遊具にあまり大きな意義を与えずにしていることを指摘して、この見解を批判したのである。

## (2) フレイベルの幼稚園への共鳴

フレイベルとディーステルヴェークとの最初の出会いは、一八四九年七月リーベンシュタインであった。フレイベルはそこ



で保母養成所を兼ねた幼稚園を開き、すでに七十歳近い老人でありながら常に喜々として幼児たちと遊び戯れ、村人から馬鹿老爺のあだ名をもつて呼ばれていたような人であった。農民の子どもたちと遊び戯れているこのようなフレイベルの姿に感動し、滞在予定をのばして三ヵ月間、毎日のように幼稚園を訪問し、保母志望の婦人たちの授業に出席したり、かの女たちと一緒に散歩したりした。

ディーステルヴェークはフレイベルのどこに傾倒したのであろうか。

まず、フレイベルが高齢であるにもかかわらず、もつとも真面目な、もつとも良心的な感性をもった人間であり、しかも幼児たちと一体となって喜々として遊び戯れる、その人間性に対してであった。次には、フレイベルが神学の教皇権から解放された自然科学者の態度をもつて、自然の探求者として人間自然の法則をよく認識していると考えたのである。ディーステルヴェークにとって、教育学が科学となり、教師や教育学者が人間自然の研究に入り、人間自然に関する知識を獲得するために、教育学が一般の世俗科学同様、神学の教皇権から解放されることは、必須の前提条件であった。彼はフレイベルがよく子どもを洞察しえていることについて次のようにのべている。

「かれの子どもについての驚くほど豊富な知識、子どもについてののほかり知れないほどの経験、子どもが表現することへの深い解釈、かれによって発見された教育—陶冶手段の美しさ、有効性、みごとさよ」<sup>15)</sup>

以上のようにフレイベルを直接知って以後のディーステルヴェークは、彼自身の教育学的理念に一致するような幼児教育は幼稚園において実現されると考えたのである。彼は「フレイベルの幼稚園といわゆる幼児保護施設を混同してはならない」<sup>16)</sup>としばしば述べている。幼児保護施設や幼児学校は、彼によれば、道徳的、身体的に子どもを保護する目的をもったものであった。その意味では積極的な教育機関としては機能していなかったのである。またこれらの施設には、両親が養育できなくなった家庭の子ども、すなわち労働者や小手工業者、貧困者の子どもが収容され、子どもたちは早くから夜遅くまで長時間施設にいた。

このような施設に対してディーステルヴェークは次のような点で幼稚園の長所を見いだしたのである。

第一に、幼稚園は子どもの発達を合自然的方法で積極的に促進しようとするものである。そこで、運動遊びによる四肢の強

化鍛練や感覚器官の訓練が行なわれる。また「恩物」、たとえば球や正六面体のような単純にしてかつ子どもをあきさせないような遊具による作業や遊びを通して、子どもは物を組み立て、何かを表現し、創造する能力を陶冶されるのである。さらにまた、ディーステルヴェークは、道徳的害悪から守るために教訓を与えたり、教義問答書を暗記させたりするという特別の訓育（道徳教育）には批判的であった。ディーステルヴェークにいわせれば、幼児期の家庭教育では、教訓や懲罰によってではなく、家族が直接に、静かに、沈黙して、その人格的作用によって訓育する。また、学校では、教科教授の中での、真理獲得の過程や教師の真理探求の態度が生徒を訓育する。この考えから、彼は幼稚園でも特別の道徳教育は必要ないとみたのである。この主張がとくに現実性、有効性をもってくるのは、いわゆる宗教教育、宗派的な教育に対する鋭い批判においてであった。

第二に、幼稚園にはすべての階層の子どもが通園することである。はじめてリーベンシュタインの幼稚園を訪問した時、身ざれいななりをした子どもも、みすばらしいなりをした子どもも一体となって遊んでいるさまに、ディーステルヴェークは深く印象づけられたようである。そしてこのような印象から民衆幼稚園を構想するのである。

第三に、幼稚園は家庭と学校の間であり、一方で家庭の教育課題を促進しながら、他方で学校教育のための最高の準備を行なうものである。家庭との関係に关していえば、ここでは子どもの無意識で自然な生活を妨げることなく、また子どもを母から離してしまうこともなく、子どもを毎日数時間だけ幼稚園で過ごさせ、家庭の教育課題が幼稚園の援助で解決されるよう配慮している。この点ディーステルヴェークはフレイベルを、「居間の教育学」のペスタロッチと、国民教育舎で両親から離して教育しようとしたフィヒテとの中間に位置するものとみている。また学校教授との関係については次のようにいっている。「実物教授の方法は今はじめて根づくことができる。なぜなら、幼稚園の子どもはたくさんの最も重要な直観表象を持って学校に来、そのことによって教師から骨の折れる仕事を軽減するのみならず、教師が抽象的教授を放棄するよう幾分かでも強制するからである」⑬

第四に、すでに「遊び」のところで述べたように、幼稚園が共同的な性格をもっていることである。

第五に、幼稚園では保母志望者のみならず将来の母が陶冶される。幼稚園で、将来の母は、子どもと接したり、客観的に観察したりする中で、子どもを知り、子どもの気性や心情特性や

努力を正しく判断し評価する能力を形成していくのである。デ  
イーステルヴェークの幼稚園普及活動は、将来の母のための女  
性教育運動と一体となつて行なわれたのである。

一八四九年の「フレイベルとゲーテ基金」という論文の中で、  
フレイベルの幼稚園や女教師養成所と提携する形で、女性のた  
めの一般教育陶冶施設を設立することを提案している。以下に  
かれがあげた理由を列挙してみよう。<sup>18</sup>

1、いわゆる教養ある階層では、婦人の教養と男性の教養との  
間に不均衡がある。

2、自分たちの小さな子どもを養育したり、教育したりするた  
めに必要な、母や娘に対する指導が不足している。

3、家族間の最初の、美しい、高貴な関係つまり家族の尊厳が  
失われてしまつてゐる。

4、乳児を養育する女性を養成するための系統的な準備が不足  
している。

5、良家の娘が、施設や家庭で教師になるために必要な教育の  
機会が不足している。

6、すべての階層の子どもが、生まれてから学校にあがるまで  
の間に、合自然的に発達することができるといふ状況にはない。

以上にあげられた理由の中で、デイーステルヴェークは、良家や

教養ある階層の女子をとくに問題にしている。ここには、デ  
イーステルヴェークの市民階級的立場があらわれているといえ  
う。

以上みてきたような見解にもとづいて、デイーステルヴェ  
ークはフレイベルの幼稚園を宣伝し、その普及に尽力した。また  
それだけでなく、自らもハンブルクの幼稚園の設立に関係した  
り、ペスタロッチ基金でベルリンに最初の幼稚園を建てたりし  
たのである。

ところが、一八四八年の三月革命に対する反革命の成功後、  
五〇年代に入ると、政府は、宗務相ラウマー——枢密顧問官シ  
ュティールによる本格的な反動教育政策をおし進めていった。

フレイベルの幼稚園もその犠牲になつたのである。すなわち一  
八五一年八月の「幼稚園禁止令」の制定である。プロイセン政  
府にとつて「ペスタロッチに源をもち、ペスタロッチ以上に子  
どもの自由な創造エネルギーの解放と育成を強調する」<sup>19</sup> フレ  
イベルの教育思想や、特定の教育、宗派教育を行なわない幼稚  
園の教育実践は、危険の上でもないものであった。さらに、幼  
稚園を盛んに宣伝しているデイーステルヴェークこそは、当局  
にとつては、「まやかしの教育」によつて「非宗教的大衆叡智」

をもたらし、革命の根本原因をつくった、最も憎悪すべき人物だったのである。

ディーステルヴェークはもちろん断固として反対した。「幼稚園禁止令」は、彼やフレibelが行なっている子どももの合自  
然的な、自由な、発達をめざす教育に対する敵対である。また、  
宗派の争いから独立することによって真に教育的でありうる  
と考えている者に対しての教会権力の介入であった。そこでその  
年の十月には、リユーベンシュタインで、ビューローロー夫人  
や、フレibelの教育論に賛同する小学校、幼稚園の教師など  
と一緒に、禁止令反対の集会を開き、声明書を発表したのであ  
る。

### むすび

今までみてきたように、勃興期の市民階級を代表する教育家  
ディーステルヴェークは、幼児教育を市民の陶冶の重要部分と  
してとらえ、しかもそれを彼の教育論の眼目である国民学校と  
結合させている。その際彼のめざした市民とは、教会および政  
権に盲目的に服従する愚鈍な人間ではなく、叡智にあふれ、自  
由に思考できる人間、不断に進歩する自己活動的な人間であっ  
た。

彼は幼児期固有の教育的課題を認識していた。それは、子ど  
もを単に道徳的墮落や身体的傷害から守るとか、逆に過度な知  
育をするとかいうものではなくて、もっと子どものもつ豊かな  
可能性を信頼した積極的な課題であった。そしてこの課題を解  
決できるのは、子どもの活動衝動にもとづいた遊びであった。  
子どもにとって遊びは自己目的でありそれを通して子どもは合  
自然的に発達するのである。彼はフレibelの理論や実践に依  
拠しながら遊びのもつ教育的意義を強調した。そしてこのよう  
な理念を最も理想的に実現してくれる幼児教育機関が幼稚園で  
あった。彼はもともと家庭にこそ幼児を教育する本来の力が  
あると考えていたが、幼稚園を知ってからは、両者が協力しあ  
って教育課題を解決すべきだと考えるようになったのである。  
ディーステルヴェークは幼児教育の専門家ではなかったから、  
もっぱらフレibelの理論に依拠し、宣伝しながら自己の見解  
を表明した。しかし、ディーステルヴェークは「あまりにも合  
理的で、生活、特に宗教的、道徳的生活の非合理性に対する理  
解が欠けている」<sup>20</sup>とさえ評されるほど合理主義者、啓蒙主義  
者であった。それに対してフレibelは、人間に内在する神性  
を明瞭に自覚し自己の生活のうちに実現することをもって人間  
の使命であるとしていた。ディーステルヴェークがこのような

フレーベルを正しく理解しえたかどうかは問題となろう。しかし難解なフレーベルの理論から神秘主義のヴェールをはぎとつて、実践に有効なように明解に説明し、実践化を容易にしたとも考えられるのである。

ディーステルヴェークが独創的あるいは系統的な幼児教育論を展開しえなかつたことは彼の弱点である。その点彼は幼児教育史上にそびえ立つ教育家とはいえない。しかし幼稚園創設期に、教育科学の確立、国民教育の確立、教員養成の充実、幼稚園の普及を、同じ性質の切りはなせない問題として論じ、また実際にも活躍した彼の功績は見のがせないだろう。

(広島大学大学院)

#### アドルフ・ディーステルヴェークの生涯

一七九〇年一〇月二九日、ヴェーストファリアのジーゲンで生まれる。大学では数学、哲学、歴史を学ぶ。一八一三年からマイン河畔フランクフルトのモデル・スクール教師になり、ここでペスタロッチの後継者たちと交際しペスタロッチ思想に触れる。一八一八年、工業都市エルフェルトのラテン語学校副校長になる。この地で労働者、ことに年少労働者の極度に悲惨な状況をまのあたりに見て強い印象をうける。また、人々から「ラインの師匠」と尊称されて

いたウィルベルクの指導する教育問題の研究会に出席し、教育問題に深い関心をよせるようになる。一八二〇年、ライン河畔メルズに新設された師範学校の校長に就任。当時、ドイツの師範学校は創設されたばかりで極度に悪い状態にあり、それを改善するために彼は苦闘し、猛烈な勉強をする。この中で一八二七年には教育雑誌『教育と陶冶のためのライン時報』を発刊する。この雑誌は彼が死ぬまで発行される。一八三二年、創設もないベルリン師範学校の校長に転任。彼は気力にあふれた厳しい教師で、自己自身にも生徒にも徹底した予習と自己規律を要求する。厳しい授業の中で、生徒たちは基礎的な広い知識を学び、教材を批判的に検討し研究する能力を身につけていく。一八三五年、『ドイツ教師のための教授指針』を編纂、一八三六年には『文明の生活問題』を出版。このころからペスタロッチ主義教授法に本格的に傾倒し、一八四五年、ペスタロッチ生誕百年祭を挙げる。しかし、一八四〇年のローマン主義者フリードリッヒ・ウィルヘルム四世即位後、彼の啓蒙主義的、合理主義的思想は次第に文部当局の不興をかうようになる。ついに一八四七年二月、社会主義的、共産主義的傾向のかどで休職を命ぜられ、七月に退職する。一八四七年三月、ドイツ三月革命、ディーステルヴェークにとっては、ドイツ民族がその国民的使命に眼覚めたという意味で「真の民族の春」であった。七月、プロイセン国民議会左

派議員たちの招きで憲法の教育条項作製の審議会に参加する。しかしまもなく反革命が勝利し、反動の嵐が吹きすさぶ。一八四九年夏、フレーベルとの出会い。一八五四年、「プロイセン三条件」が公布され、これに対する反対運動をくり広げる。一八五八年、下院議員に選出され議会の中で民主的教育的表現をめざして戦う。一八六六年七月七日、国民学校とその教師のため生涯を捧げた闘士ディーステルヴェークは最後の眠りにつく。

### 参考文献

- ① F・A・ディーステルヴェーク『ドイツ教師のための教授指針』フォルク・ウント・ヴィッセン、一九六二年 S・59
- 長尾十三三訳『市民社会の教育』明治図書、一九六三年、P 17
- ② 同右 S・248
- ③ 同右 S・101 ④ 同 S・116ff
- ⑤ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第八卷、フォルク・ウント・ヴィッセン、一九六五 S・166
- ⑥ F・A・W・ディーステルヴェーク『教育指針……』 S・362
- ⑦ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第九卷、一九六七年 S・66
- ⑧ 同右 S・66
- ⑨ 同右 S・66
- ⑩ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第八卷、S・167
- ⑪ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第九卷、S・66
- ⑫ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第二卷、一九五七年 S・390
- ⑬ 同右 S・389
- ⑭ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第五卷、一九六一年 S・501
- ⑮ 東ドイツ、ディーステルヴェーク委員会編『ディーステルヴェークと現代』フォルク・ウント・ヴィッセン、一九六七年、S・147
- ⑯ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第九卷、S・286
- ⑰ カール・ハイנטツ・ギュンター他『就学前教育史』、フォルク・ウント・ヴィッセン、一九六八年、S・176
- ⑱ ゲエツツェ「アドルフ・ディーステルヴェークとフリードリッヒ・フレーベル」、『教育学雑誌』第82号、一九二一年、S・11<sup>10</sup>
- ⑲ 梅根悟『近代国家と民衆教育』誠文堂新光社、一九六七年、P 279
- ⑳ 篠原助市『欧州教育思想史(上)』創元社、一九五〇年、P 596